

# 連作短説

## 「グランアルカナ」

TAN-SEISU sequences

〈grande arcana〉

森田カオル

### 目次

0	XXI	XX	XIX	XVIII	XVII	XVI	XV	XIV	XIII	XII	XI	X	IX	VIII	VII	VI	V	IV	III	II	I
続・粗忽の使者	小さい世界	最後の審判	遺産	変身	星	不幸な王子と小人たちの話	悪魔	節制	死の天使	スプーン一杯の幸福	罪と罰	運命の輪	交渉人	エキスパンダ	戦車	縁日	ヒーロー戦隊ソルジャーファイブ	ランナーズ	卵	白雪姫異聞	魔法

連作短説「グランアルカナ」Ⅰ

魔法

森田カオル

「お帰り。早かったのね。おやつ用意してないのよ。ご飯までもたないよねえ。ちよつと待ってて」

母はさつと台所に向かう。薄力粉と卵、砂糖にベーキングパウダーとココアの粉末。牛乳がないときはコーヒー用のクリームパウダー。微塵のためらいもなくこれらの物を棚から取り出すと、ボールに入れて水を注ぎ手早くかき混ぜる。そうしたら次にはレンジシートを小鉢の中にびったりと張り、生地を流し込む。電子レンジで二分弱。それだけで、とびつきりおいしいスチームケーキのできあがり。

母の手は、わたしのためにさまざまな物を生み出してくれた。あるときは家庭科の裁縫箱を入れる手提げ袋だったり、またあるとき

は玩具だったり。あたかも、何もないところから素晴らしいものを生み出すような、魔法の手だった。

わたしは歳を取り、母も老いた。

実家に帰る度に、小さくなった母の肩を、背中をさすり、揉み解しながら雑談をするのが楽しみになってきた。

長年、家族ために働き続けてきた母。背中も丸くなり、体も硬くなってしまったが、幸いに、まだ健康でいてくれる。わたしはあまり出来の良いい娘ではなかったが、真似事のようにでも親孝行ができるのは、ありがたいことだな、と、最近思うようになってきた。

マッサージをすると、母は暫くわたしの手に体を委ね言葉に相槌を打っている。ひとしきり揉み終えると、心地よさそうに伸びをして、わたしに向かってこう言うのだった。

「ありがとうねえ。肩こりも腰の痛いのもふっ飛んでいっちゃうよ。お前の手は、魔法の手だねえ」

連作短説「グランアルカナ」II

## 白雪姫異聞

森田カオル

魔方陣から現れたのは、紅蓮の髪と黒い肌  
に申し訳程度の布地を纏っただけの、女の妖  
魔であった。半ば廢墟の大広間の片隅から少  
女の漆黒の瞳がそれを見上げている。黒髪は  
解れ白磁のような肌も煤けてはいるが、美し  
い面立ちや表情に気品が漂っている。

だが、容貌とは不似合いに間延びした口調  
で少女が話しかけた。

「私はスニーヴィッツヒエンといいます。『白  
雪姫』という意味です。あなたは魔界からい  
らした方ですかあゝ」

「如何にも」妖魔はナヴァと名乗った。

「わかっておる。実の母親から命を狙われてい  
るのだな。えげつない話じゃ」

「助けて欲しいんです。せめてお母様から逃  
げられるように」

緊張感の無い喋りだったが、表情は切羽詰  
まっている。

「吾が使える能力は変化（へんげ）のみだが、  
そなたの役に立つであろう。ただ、吾は現世  
では実体を持たぬゆえ、そなたに憑依させて  
もらう。それが、吾が力を貸す契約の条件だ。  
心配無用、そなたの人格まで奪ったりせぬ」

妖魔は少女に手招きをする。誘われるまま  
少女は魔方陣へ足を踏み入れた。

その途端、周囲は閃光と轟音に包まれた。  
重なる絶叫。館のみならず世界中が振動した。

…：焼け落ちた館の中心に、一人の女が立  
っていた。ブロンドの髪と小麦色の肌。そし  
て青白いローブを纏っていた。呆然としてい  
た女は、我に振り返り自分の頬を幾度も叩いた。

「おいナヴァ、返事をしろよ」

彼女の叫びだけが、空しく焼け跡に吸い込  
まれていった。

「ナヴァの奴、アタシに吸収されちまった！」  
性格が激変したが、それは白雪姫であった。

卵

森田カオル

トイレでショーツを下ろしたら、小さな卵形のものの中にあつた。鶏卵ほどの白い物体がいつの間にか入っていた。それは少し濡れて温かだった。

自分が産んだ？ ……としか考えられないけど、何なのだろう。卵？ ……まさか。自分が卵を産むなんてあり得ない。とりあえず冷静にならないと……。

ユニットバスの洗面台に温めの湯をはってその物体を浸した。膝下に絡まっているスウェットパンツとショーツをすっかり脱いだ。腰から下は裸のまま部屋を横切り衣装ケースを開けて新しい肌着を用意した。そして上半身に纏っていたＴシャツとトレーナーもすべて脱ぎ去って、再びユニットバスに戻った。カランの横の水栓をひねって熱いシャワーを

頭から浴びる。

きて、どうしよっか。気味悪いけど、棄てるのもしのびない。本当に何かの卵なら、いったい何が孵るんだろう。

シャワーを止めてバスタブにしゃがみ込む。友達にメールしてみよう。彼女は何て言うかしら。本気にしないで笑うだけかも。それに、卵じゃなく他の何かだったら、呆れられるに違いない。

立ち上がり、改めてその物体を見た。静かな水底でそれは少し震えているように見えた。

もしこれが命あるもので、わたしから生まれたのならば、わたしの命を受け継いでいるだろう。生まれてくるのは異形のものかもしれない。でも、孵してみたい。生まれ来るものに触れてみたい。

湯の中からそれを取り上げてじっと見つめた。艶やかな表面は虹彩を帯びていた。

そのとき、それが少し動いたように見えた。まるで小首を傾げたかのように。

連作短説「グランアルカナ」IV

ランナーズ

森田カオル

走る男の後を、青年は追いかけていた。青年の手には、太くて長い杖。これが無いと思うように走れないのだった。

男はわき目も振らず、来る日も来る日も走り続けていた。青年も、ひたすら男の後に付いて走った。

道は、大地の上をどこまでも伸びていた。

男は無論、青年の存在に気付いていたが、何の干渉もせず、言葉さえかけず、そのなすがままに任せていた。青年も男に声をかけることは無かった。

男に付いて走るのは、初めは相当に辛い事であった。しかし、日が経つにつれ、次第に辛さが軽くなってきているのを、青年は感じた。いや、それどころか、一緒に走り始めた頃に比べて、男のペースが上がっているのに

気付いた。いつしか、杖も不要になっていた。

二人は、暫く前後に連れ立って走っていた。ある日、先に行く男がふと立ち止まり、その場に蹲った。何かかと思ったが、何のことは無い、靴紐を直し始めたのだった。

青年は、男の傍らに立ち止まろうか、と思った。しかし、思い直してその脇をすり抜け、前へ出た。

少し走って青年は、初めて、後ろを振り返った。

すると、男はすつくと立ち上がり、ニヤリと笑った。次の瞬間、男は青年をめがけて突進してきた。青年は恐慌した。逃げ出したがたちまち追いつかれた。

男は青年に飛びついた。何をされるのだろう。青年は観念して立ち止まった。が、不意に男は高らかに笑い、青年の肩を抱き、右手を差し伸べた。二人は固い握手を交わした。

二人はまた、共に走り出した。今度は肩を並べながら。

連作短説「グランアルカナ」V

## ヒーロー戦隊ソルジャーファイブ

森田カオル

「で、誰がリーダーなのかが問題だ」

部屋に女性を含む五人の若者が集っていた。

「誰がって、当然俺に決まってるじゃん」

血気盛んな男が自信満々に言った。

「理由は」と侠な感じの女が聞く。

「長官からは口止めされてるんだが、はっきり

言われた。俺がソルジャーレッドだってな」

しかし目つきの鋭い男がその言葉を遮った。

「レッド＝リーダーって、お約束だが、果たし

て俺達にそいつが当てはまるかは疑問だ」

「どういう事だ」

「お前はレッドだ。で、俺はソルジャーカーマ

イン。すなわち、〈赤〉なんだ」

一同の顔色が変わった。

「さっきそこにいるカレンちゃんに聞かれたんだ。『マゼンタってどんな色なの』ってな。

マゼンタってのは印刷に使う色で、紅色なんだ。他のみんなは何色って言われた？」

「僕はバーミリオン」

「あたしはスカレットだってさ」

「ほら、みんな赤色なんだよ」

「じゃ、あたしがリーダーでもいいじゃん。今

じゃ戦艦の艦長は女が多数派なのよ」

「それはアニメの話だ」

その時、扉が開き、一人の老人が部屋に入ってきた。

「諸君、遅くなってすまない。わたしがこの戦

隊のリーダー、ソルジャーシルバーです」

一同は口を開けたまま男を見た。

「ソルジャーファイブなのに、なんで六人目の

メンバーがいるのよ」

「細かいことは気にしなさんな」

「それはいいけど、アタシ達みんな赤色なのに、

何であなただけシルバーなの」

「ああ。わたしは市のシルバー人材センターから派遣で来たのだ」

連作短説「グランアルカナ」VI

縁日

森田カオル

祭りで賑わう神社の本殿の裏手、人気のない薄暗がりには、紺の浴衣のアヤは蹲っていた。

彼女はタツヤの姿を見取ると、すっと立ち上がって彼を見つめた。やはり泣いていたらしい。いつもきつい印象を与える彼女の目つきだが、愁いを帯びて潤んでいた。

「こっちへ来て」

不意に彼女は手を掴むと、裸電球の灯る小さな祠の前にタツヤを連れてきた。

虫籠ほどの大きさの賽銭箱のようなものが、その前に置いてあった。

「五円玉入れてみて」

有無を言わさぬ口調に押され、言われるままに取り出した五円玉を賽銭箱のような物の上から投げ入れた。すると、その底の辺りから、小指ほどの大きさの巻物が転がり出した。

タツヤがそれを取ろうとするが早いか、アヤはきつとそれを攫うと乱暴に封緘を引きちぎって広げた。

（アヤトエニシナリ）

赤っぽい色の文字は、そう読めた。アヤは自分の帯に挟んであった紙切れを開いて、タツヤの目の前に広げた。青っぽい文字で（タツヤトエニシナリ）と書かれていた。

「どう思う。」

詰問するような口調でアヤは言った。

「これ、いくらお金入れても二度と出ないの」

アヤは財布の中からすべての小銭を出して、タツヤの前で一枚一枚投げ込んだ。しかし硬貨はすべて箱の底から吐き出されてしまう。タツヤも倣ったが、同じだった。

「これが出たすぐ後に、アキヒロにさよならって言われて、泣いてたらあなたが来たの」

タツヤもアヤも、そのまま黙ってしまった。祭りの賑わいから取り残されたように、鈴虫の声が聞こえていた。

戦車

森田カオル

家族で帰郷していた所へ、旧友が訪ねてきた。

「へえ、キョウちゃん、レースやってるんだ」

新年の挨拶もそこそこに、納屋の前にあるバイクを見て、旧友はそう聞いてきた。

「俺じゃなくて、倅のだよ」

無理もない。息子は去年やっと十六になっただけだ。免許も取得して日が浅い。

「明日、こっちでレースなんだ。里帰りのついででわけ。草レースだけど。あいつ、バイクで金貯めて中古の原付やら何やら自分で準備しててさ。ま、反対する理由はないし」

「やっぱり、血かな」と旧友。

「何でだ」

「キョウちゃんってさ、『ガンブラ』全盛期にひたすら『F1』だったじゃないか」

確かに、アニメのロボットプラモデルのブーム時に、自分はフォーミュラカーのプラモデル制作に没頭していた。

「テレビ番組でも、戦争の話とか、戦隊物とか、全否定だったもんな、キョウちゃんは。変わり者だと思ってたけど、今思うと、筋金入りの反戦論者だったってわけだ」

息子も、ヒーロー物の番組は見なかった。

自分の意見押し付けたことはなかったつもりだ。だが、気付けば父親に思想が似ていた。

殺し合いが嫌、という彼の思いは、やがて形を変え、己を鍛える方向性を得たらしい。

小学生の頃から近所のバイク屋に顔を出し始め、ジュニアレースにも出ていた。高校受験の際にも、整備士になるか機械設計に進むか悩んだ挙句、後者を選び、そこから猛勉強で、難しいと判定されていた進学校に滑り込んだ。

今、彼は納屋の前で、自分の戦闘マシンの整備に余念がない。BGMにジョン・レノンを聞きながら。



連作短説「グランアルカナ」 VIII

エキスパンダ

森田カオル

「強力エキスパンダあります」

という手書きのPOPが目に入った。体を鍛える道具を探していたのだった。店の中は健康器具やら健康食品やらさまざまな物がしかし意外に整然と陳列されている。ガラス戸を開けると人の良さそうな中年女性の販売員が出てきた。

「体を鍛えたいのですしたら最新器機もありますよ」

「いえ、低周波のビリビリってのは苦手で……やっぱり昔ながらのトレーニングがいいんですけど」

彼女は少々訝っている様子だったが、やがてこう言った。

「うちの（エキスパンダ）ですか？ あれはトレーニング器機ではありませんよ」

そしてレジ下のショーケースから、寸胴な広口瓶を取り出した。

「これなんですよ」

瓶のラベルを見ると、「原材料 ジャイアン トパンダ」と描かれている。

「ワシントン条約に引っかかるでしょー！」

「大丈夫、雑種にしてあるから。比内鳥なんかと一緒にすよ」

「パンダと何を掛けたんですか」

一日一錠、個人差はあれおよそ十日で筋肉量がはつきり増えるると説明された。それでも倫理上の問題があると言うと、彼女は言った。

「滋養のために鰻を食べると一緒にすよ」

彼女はカウンターの上にパンダの描かれた小袋を出した。「試供品です」

躊躇していると彼女は言った。

「三分分です。これだけでも結構力の漲りを実感できますよ」

小袋を取り、上目遣いでわたしは言った。

「……鰻を食べると、一緒にすよね？」

連作短説「グランアルカナ」IX

## 交渉人（白雪姫異聞2）

森田カオル

「大体の事情は了解した」

髭の中に顔の造作が点在しているような、背丈の低いずんぐりした男——ドワーフが、鋭い視線を向けている。視線の先に、黒髪に白い肌、白い外出用ドレスのあどけない少女が座っている。スニーヴィツヒエンであった。「お前さんを此処に匿う条件の前に、一つ聞いておきてえ事がある」

男が鋭い視線を向けた。

「お前さん、本当に人間族か？ さっきその長椅子で眠っていた姿と今のその姿とがまるつきり違うのは、何でだ」

「私、変身できるんですよー」

ドワーフは訝しげに顎髭をいじくっている。

「その変身能力とやらで、刺客から逃げるといふ懸案は、解決できんのかな」

「一日中変身してられないんです。くたびれちゃうんですよー」

今の姿が、変身状態である事は黙っていた。「いいだろう。邪悪な者ではなさそうだ。ただし、匿ってやるにあたって条件がある」

「洗濯炊事なら、一応、できますよー」

しかしドワーフは首を振り、寢室のドアを開けた。七つのベッドのうち六つにはドワーフの仲間が横たわっていた。

「家に入ってきた時に気が付かなかったか？ 俺以外は皆大怪我しとる。ゴプリンに襲われたんだ。どうにか追っ払ったがこの有様だ」

「まあ、御勞しい」

ドワーフの口調は懇願の色を帯びてきた。

「家事なんかどうでもいい。なあ、仲間が復帰するまで俺と一緒に粗金掘りを手伝ってくれないか。この様じゃ商売上がったりなんだ」

「はあ……」

家事も粗金掘りもどちらも御免被りたい白雪姫であった。

連作短説「グランアルカナ」X

## 運命の輪

森田カオル

ふと立ち寄ったバーで、私は時間を遡る奇跡を体験した。時計は一分前の時刻を示し、灰皿の煙草も吸う前に戻っていた。トリックを疑う余地は無かった。奇跡を起こしたのは、一人の老紳士であった。

「自分が辿ってきた人生、選択肢を誤ってきたのでは、と考えていませんか？」

紳士は私の胸の奥に潜む鉛のような思いを、あたかも以前から知ってのように指摘した。

私は妻一人養う事もままならないワーキングプア。小さな学習塾の契約講師である。

「二十年位戻ってみたいと思いませんか？」

紳士の誘いに、私は鼓動が高まるのを感じた。だが、同時にある事に気が付いた。

「過去に戻ったら、今のこの世界は、この時間の世界は、いったいどうなるのですか？」

「この時間の世界は変わりません。歴史は連続します。あなたが突然行方不明になる、というだけです」

「すると、私の妻は……」

「独りで生きていくことになるでしょう」

私は拳を眉間に押し付け目を瞑った。葛藤が続いた。そして、一つの決心に辿り着いた。

「このままでいます。私の独善で、妻を泣かすことはできません」

それを聞いた紳士は、莞爾として言った。

「よくぞ気が付きました。前回、あなたは自分の願望のまま行動してしまったのです。覚えていらっしやらないでしょうけど」

「前回？」

「そう、前回お会いした時、あなたは人生をやり直したいという願望だけでした。係累のある人たちにまで考えが及ばなかった……」

その時、次に彼から発せられる言葉が何か、直感した。冷たい汗が背中を滴っていった。

「今のあなたの人生、既に二回目なのですよ」

罪と罰

森田カオル

「あー、そこのお嬢さん、駄目だよー」

吸殻を道端に投げ捨てた途端、警官に呼び止められた。

「ごめんなさーい」

悪びれる風もなく答えた。すると警官はハンディターミナルをシオルダーPOCHから取り出すと、女の顔にかざした。

「二十点減点だよ」

「は、はあっ?」

呆気に取られている女に、警官は言った。

「知らないの? 今月からだよ、始まったの。」

『国民点数法』

女の顔がみるみる蒼ざめていく。

「あたし、三年位日本を離れてて、一昨日帰ってきたばかりで……」

しかし警官はかまわずに続けた。

「累積減点百で人権剥奪だから気をつけて」

「ジンケン……って、何それ」

「人として扱われないって意味。……あつ、君、

さつき（歩きタバコ禁止区域違反）やってる

ね。昨日は（ごみポイ捨て違反）と、（電車内

携帯電話通話違反）で……まずいよ、もう累

積七十点になってるよ」

「マジありえない。いつチェックされたの」

「今は町中監視カメラだらけだし、個人特定の技術も進歩したからね」

女は少し考えていたが、また外国へ行こう

というようなことを言った。だが警官は気の

毒そうに彼女の言葉を遮った。

「五十点超えたら海外渡航が禁止される」

「そんなひどい。……ところで、普通の犯罪って何点取られるの?」

「刑法犯は刑事罰だから、点数は関係ないよ」

「良かったあ〜」

と、思わず口走って、ハッと警官の顔を見た。彼の目がキラリと光った。